

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：12501  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2020～2022  
課題番号：20K01469  
研究課題名（和文）ポジティブ政治心理学の理論と実証 政治システムと心理的ウェルビーイングの関係

研究課題名（英文）Theoretical and empirical study of Positive Political Psychology: The Relationship between Political Systems and Psychological Well-Being

研究代表者  
小林 正弥（Mssaya, Kobayashi）  
千葉大学・大学院社会科学研究院・教授

研究者番号：60186773  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ポジティブ心理学と政治哲学を架橋し、ポジティブ政治心理学という新学問分野を心理学の国際ジャーナルで理論的に提起した。さらに2020年～2021年の3回の調査で、本研究の理論モデルの妥当性を実証した。まずコロナ禍の影響で、ウェルビーイングが継続的に下降し、ウェルビーイングと経済的格差とが関係していることを明らかにした。政治的インプットに関しては、ウェルビーイングと選挙結果の関係が存在するという初期的分析結果を明らかにした。政治的アウトプットに関しては、経済的・社会的要因とともに、正義・公正などの政治的要因がウェルビーイングや心身の健康と関係していることを明らかにし、日英双方の言語で公表した。

1

研究成果の学術的意義や社会的意義  
ポジティブ政治心理学の提案は世界で初めてであり、ポジティブ心理学にとっても個人のウェルビーイング研究を政治的領域に拡大するという点で国際的な学術的反響・意義が大きかった。ウェルビーイングと選挙結果との関係が立証されれば、心理的要因が政治に大きな影響を与えていることが明らかになるので、政治に対する社会的意義が大きい。経済格差や正義・公正などの政治的要因がウェルビーイングや心身の健康格差に日本でも影響を与えていることが明らかになったので、格差の縮小や正義・公正の実現が人々のウェルビーイングや心身の健康のために重要であることが明らかになり、公共政策を考える際に大きな社会的意義が存在する。

研究成果の概要（英文）：By bridging positive psychology and political philosophy, this project theoretically proposed the new discipline of positive political psychology in the International Journal of Psychology. Furthermore, this project demonstrated the validity of its theoretical model in three surveys from 2020 to 2021. First, we found that well-being continuously declined in the wake of the Corona disaster and that well-being is related to economic inequality. With respect to political inputs, our initial analysis reveals the existence of a relationship between well-being and electoral outcomes. Concerning political outputs, we found that political factors such as justice and fairness, along with economic and social factors, are related to well-being and physical and psychological health, and we published the results in both English and Japanese.

研究分野：政治学

キーワード：ウェルビーイング 価値観変化 ポジティブ心理学 政治心理学 正義 公正 市民性

### 1. 研究開始当初の背景

政治心理学は政治学と心理学の接点にあり、1977年の国際政治心理学会設立後に大きく発展した。国内では2005年前後に2冊の紹介書が刊行されたが、その後は研究成果が少ない。そして従来の政治心理学は主に、主に、権威主義的ないしマキャベリのリーダーシップや、民族紛争、虐殺、政治的非寛容、テロ、国際的紛争などのネガティブな政治的現象やその要因の分析に力点があった。これに対して、ポジティブ政治心理学の課題は、健全な政治の要因や政治的ウェルビーイングの実現のための条件を研究したり、健全な政治のもたらす結果を探究することである。

### 2. 研究の目的

研究代表者は「善き生」や美德を重視するコミュニタリアニズムの政治哲学の視角を踏まえ、ポジティブ心理学の泰斗であるM.セリグマンらの交流を背景に、政治のポジティブな側面も研究して、ネガティブ ポジティブ双方の政治的現象を共に取り扱う包括的な新しい政治心理学の確立を目指す。このため、既存の政治心理学を踏まえつつ、ポジティブ心理学の成果を活用して、政治心理学の包括的理論を構築して政治システム論と接合させ、「ポジティブ政治心理学」を確立することが研究目的である。このため、その理論を構築し、実証研究を行って、政治システムと心理的ウェルビーイングの関係を探究する。

### 3. 研究の方法

理論的研究としては、コミュニタリアニズムの洞察を経験的に展開するために、既存の政治心理学を踏まえつつ、ポジティブ心理学に基づいて政治を研究する包括的理論枠組みを新しく提起する。それは「ウェルビーイング(幸福感など) 人格特性(美德・強みなど) 政治的システム(議会や行政などの制度や公共政策など)」の3本柱に基づく一般的理論枠組みである。これにより、ポジティブ政治心理学は政治システム論と理論的に接合することができる。

実証的研究としては上記の変数をデータ収集・分析し、ウェルビーイングと「政治的インプット=選挙結果」及び「政治的アウトプット=政策」との関連性を、その他の社会経済条件と比較検討し、理論モデルの妥当性を検証する。政治的インプット(選挙)については、ペンシルバニア大学のL.アンガーが行った2016年米国大統領選挙の研究(共和党・トランプ支持への変化が、人口統計上の要因や経済的要因よりも有権者の主観的ウェルビーイングと高く相関している)を参考にする。また、政治的アウトプット(政策)については、I.プリレルテンスキーらの多次元的ウェルビーイングの計測方法も用いて、正義・公正などの政治的要因とWBとの関係を調査する。本研究はこれらの先端的研究の方法を日本に適用して、社会経済的な要因との関係に注意しつつ、主観的・客観的ウェルビーイングと政治的インプット/アウトプットの関連性について調査・分析する。

### 4. 研究成果

コロナ禍によって、対面での国際会議や国際的交流は実現できなかったが、プリレルテンスキーやオズとのオンラインセミナーを実施し(2022年7月、2023年3月)、いずれも活字で公表している(2023年2月、2022年4月)。実証的調査(オンライン調査)は、2021年3月、2021年10月、2022年7月と3回実施した。

研究成果としては、まず2020年度までには、理論的研究に関して研究代表者の小林は『ポジティブ心理学』(講談社)を刊行するとともに、「ポジティブな動的公共システム論」という理論を提起して、関連論文を4本公表した。その基礎になった国際セミナー(2019年12月)の記録を活字化し、リンジー・オズとアーロン・ジャーダン、小林の発表と議論を2021年3月に公表した。この際の議論を基礎に、研究分担者の石戸は論考を執筆した。石戸と李は関連研究を実施し、それぞれが英文共著論文を執筆した。これらは『公共研究』第17巻第1号(2021年3月)で「特集 ウェルビーイングとシステム論」として掲載された。

小林と石戸は、それぞれ上記理論と地域統合を中心的な主題とする理論的・実証的論文を執筆して『多元化する地域統合』(石戸光・鈴木絢女編、岩波書店、2021年3月)で公表した。この小林論文は、ポジティブ公共システム論の観点に基づいて、ウェルビーイングと参議院選挙(2019年)との関係についての実証的分析を含み、日本でもウェルビーイングが「政治的インプット=選挙」に影響を与えていることを明らかにした。これは、本研究における実証分析の成果である。

さらに小林・石戸・李は公正社会に関する思想的・理論的論文をあわせて4本執筆して水島治郎・米村千代・小林正弥編『公正社会のビジョン』(明石書店、2021年4月)で公表した。小林の第3章「多次元統合的公正社会理論 協力的公共システムにおける規範的4基準」は、ポジティブ公共システム論を公正社会論として理論的に展開したものであり、李・小林の共著である第9章も、この理論を基礎にして「環境的公正」という概念を提起した。

2021年度～2022年度に関しては、理論的研究としては、*Frontiers in Psychology* 掲載の「政治哲学とポジティブ政治心理学 共通善のための学際的枠組み」(Political Philosophies and Positive Political Psychology: Inter-Disciplinary Framework for the Common Good) で、政治哲学とポジティブ心理学の学際的な架橋の枠組みを提起し、英語論文では世界で初めてポジティブ政治心理学を提起した。政治哲学の進展を概観してから、「個人的/集合的」「倫理的/非倫理的」という2軸で現代政治哲学を位置づけ、市民性(シティズンシップ)・正義・ウェルビーイングの關係に注目して、功利主義、リバタリアニズム、リベラリズム、コミュニタリアニズムを整理した。その中で、コミュニタリアニズムにおいて、市民性や正義とウェルビーイングがもっとも密接に関連している。

この整理は、心理学の知見に基づいて、政治哲学の理解を深めるためにも寄与する。「従来の心理学/ポジティブ心理学」という対比と同じように、「従来の政治哲学/ポジティブ政治哲学」という対比を考えることができ、功利主義やコミュニタリアニズムはポジティブ政治哲学とみなすことができるからである。こうして、共通善を探究するための(社会科学を含めた)学際的協力が可能になるような学際的な枠組みを提起した。

続けて、同誌所収の「政治心理学の心理学的検討 日本における市民性・正義・ウェルビーイングの相互關係 (Psychological Examination of Political Philosophies: Interrelationship Among Citizenship, Justice, and Well-Being in Japan)」で、上記の枠組みに基づき、代表的な政治哲学に基づく仮説を想定し、2回のインターネット調査(2020年6月、2021年3月)の結果をもとにそれぞれの妥当性を検証した。その結果、市民性、正義、WB(もしくは政治的WB)間に強い相関が明らかになった。また、これら3つの間の相関關係のほとんど全てについて、美德に関連するWB指標を用いた相関關係の方が、快楽に関連するWB指標を用いた相関關係よりも高いことが判明した。これらの知見はコミュニタリアニズムに基づく仮説ともっとも整合的である。

また、市民性と正義は、一般的なWBよりも政治的WBと密接に関連していた。さらに、格差解消とWBには正の相関があり、社会で格差が減少している方が人々のWBは高まる傾向がある。快楽に関連するWB指標よりも美德に関連するWB指標を用いた方が、倫理的正義とWBとの相関の方がより大きいものだった。これは、福祉などによる分配的正義は倫理的側面に関連があることを示している。これらは、やはりコミュニタリアニズムに基づく仮説と整合的である。市民性・正義・WBの3つの概念の關係は政治哲学において重要な点なので、これらの結果は、他の政治哲学に比して、コミュニタリアニズムの信憑性を高めるものである。

これらの研究により、政治哲学とポジティブ心理学を統合してポジティブ政治心理学という枠組みを世界で初めて提起し、それによって経験的研究を行うことができるようになった。政治システム論との統合に関しては、前述のように邦語ではすでに「ポジティブな動態的公共的システム論」で公表しているが、英語では以下の実証的論文や、Palgrave から出版予定の共著で略述している。

この枠組みに基づく実証研究としては、2020年6月、2021年3月、2021年10月の調査1～3に基づき、コロナ禍におけるウェルビーイングなどが、先行調査とあわせ3回の調査を通じてWBが一貫して下落するとともに、精神状態と価値観が両極化し、正義・公正がウェルビーイングに好影響をもたらしているということを明らかにした(石戸光・水島治郎・張曉芳編『アフターコロナの公正社会 学際的探究の最前線』(明石書店、2022年)の第5章「コロナ禍における幸福度と公正 ポジティブ心理学からの考察」、英語論文は近日中に前述の英文書籍にて掲載予定)。

具体的には、幸福度の低下:PERMA指標と人生満足度指標をはじめ、調査したほとんど全ての指標で、継続的な減少傾向が検出された。コロナ禍における精神・価値観変化の両極分化:コロナ禍における精神状態の変化においては、悪くなったと答えた人が多かったものの、良くなったと答えた人も一定の割合あり、3回の調査で二極化が現れた。また、両極分解の傾向は、基本的・物質主義的な欲求の方向(安心・安全と経済の重視)と精神的・脱物質主義的な欲求の方向(精神性・心と自己実現の重視)の双方が増大するという価値観の変化(調査1・3)でも見られた。ウェルビーイングにおける正義・公正の好影響:正義・市民性と(主観的な)WBとの關係については、調査1・2で共分散構造分析を行い、「正義・公正や市民性がWBに好影響を与えている」というモデルが、データと適合性があるという結果が得られた。コロナ禍における気分の変化に関してシステム論に即して分析し、調査2・3について、正義・公正と市民性の双方が、良い方向への変化(明るさの増加)と正の方向に相関しており、悪い方向への変化(暗さ・不安・滅入りの増加)と負の方向に相関しているという結果が得られた。よって、「公正・正義や市民性と、WBや明暗変化が關係している」という推論が成り立った。正義・公平や市民性とWBは正の方向で關係している、コロナ禍における明暗変化とも關係しており、ネガティブ化の抑制では顕著だった。

以上から、特にコロナ問題の長期化に伴い、WBが低下し、WBと価値観について継続的な両極化の傾向が判明した。そして、明暗変化においては、公正・正義と市民性が、ウェルビーイングの増加と關係しており、コロナ禍においてはネガティブ化を抑制するという傾向や効果がわかった。よって、公正の実現は、人びとの幸福感を増加させ、コロナ禍において、気持ちが暗くなるなどのネガティブな方向への心理的变化を抑制し、若干はポジティブな心理的变化を促していた。

さらに、ポジティブ政治心理学の枠組みに基づき、調査1と調査2を分析し、経済的状況と身体的・心理的健康とが関係していることを明らかにした。そしてこのような健康格差には、生物学的要因などに加えて社会的要因が大きな役割を果たしており、後者の中に政治的要因が存在し、公正・正義の存在（主観的認識）が、コロナ禍によるウェルビーイングの低下を抑制する効果をもったことを実証した。

この結果が、小林・石戸などの英文共著論文「コロナ禍の日本における心理的健康格差の多次元動的ダイナミクス—社会経済的・倫理政治的要因における公正・正義（Multi-Dimensional Dynamics of Psychological Health Disparities under the COVID-19 in Japan: Fairness/Justice in Socio-Economic and Ethico-Political Factors）」で、*International Journal of Environmental Research and Public Health*に掲載された。

身体的な健康に関しては、健康の格差に対して、貧富の格差などの社会経済的要因が影響していることが国際的に明らかになっているので、この研究においては、心理的健康格差という概念を提起し、これに関する生物学的・社会的要因を分析した。

分析結果として、「コロナ禍における幸福（ウェルビーイング：以下WB）度の継続的な低下、心理的健康の格差と客観的経済格差との密接な関係、心理的健康格差と主観的社会的要因との関係」が明らかになった。社会的要因には、自然環境、社会コミュニティ、経済、政治が存在する。本研究は「正義/公正」が人々の心理的健康に影響を与えていることも明らかにした。健康格差に関して正義/公正に関する政治哲学の議論との関係も考察し、思想的研究と実証研究とを架橋した。それを踏まえて、コロナ禍のような危機において、WBの減少をなるべく和らげるために、正義/公正を増大させる公共政策が望ましいという実践的提言も行った。

2022年度には、さらに研究グループ全体で、2022年7月の参議院選挙に際しては、2021年度の衆議院選挙時と類似した調査を行い、クライエンテリズムやポピュリズムなど比較政治学や政治文化に関する調査項目を導入し、選挙分析を開始した。

これらを総括すると、理論的には、ポジティブ政治心理学の理論枠組みを国際的に提起した。その上で、実証的には、ウェルビーイングと政治的インプット（選挙結果）に関して、初期的分析結果を公表して、現在も分析を進行させており、ウェルビーイングと政治的アウトプットとの関係については、システム論と関連させた上で、公正・正義をはじめ政治的要因と（心理的）ウェルビーイングや心理的健康との関係を明らかにした。これらによって、ポジティブ政治的心理学という新しい学際的領域を国際的に提起し、その枠組みに基づいて、政治的インプットないしアウトプットとWBとの関係を分析した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>Masaya Kobayashi(小林正弥), Hikari Ishido(石戸光), Jiro Mizushima(水島治郎), Hirotaka Ishikawa(石川裕貴)  | 4. 巻<br>19(24)       |
| 2. 論文標題<br>Multi-Dimensional Dynamics of Psychological Health Disparities under the COVID-19 in Japan: Fairness/Justice in Socio-Economic and Ethico-Political Factors | 5. 発行年<br>2022年      |
| 3. 雑誌名<br>International Journal of Environmental Research and Public Health  | 6. 最初と最後の頁<br>16437  |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.3390/ijerph192416437  | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>張曉芳(訳)、小林正弥、水島治郎、石戸光(監訳)   | 4. 巻<br>37(3)        |
| 2. 論文標題<br>基調講演「ウェルネス、公正、高価値観 共通善のための心理社会財」アイザック・プリレルテンスキー著  | 5. 発行年<br>2022年      |
| 3. 雑誌名<br>千葉大学法学論集   | 6. 最初と最後の頁<br>87-115 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.20776/S09127208-37-3-P087   | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>李想   | 4. 巻<br>45           |
| 2. 論文標題<br>「年間 300 万円未満」の政策方針は適切か  | 5. 発行年<br>2022年      |
| 3. 雑誌名<br>人文公共学研究論集  | 6. 最初と最後の頁<br>86-93  |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.20776/s24364231-45-p86  | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>李想, 鈴木宣弘   | 4. 巻<br>18(1)        |
| 2. 論文標題<br>Risk factors affecting feed rice production in the Kyushu region  | 5. 発行年<br>2022年      |
| 3. 雑誌名<br>公共研究   | 6. 最初と最後の頁<br>48-59  |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.20776/s18814859-18-1-p48  | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-            |

|  |                  |
|--|------------------|
| 1. 著者名<br>木下征彦   | 4. 巻<br>28(2-3)  |
| 2. 論文標題<br>地域社会における 歴史遺産 に対する評価の変遷 地域社会における 歴史遺産 に対する評価の変遷 | 5. 発行年<br>2023年  |
| 3. 雑誌名<br>総合文化研究   | 6. 最初と最後の頁<br>1- |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                             | 査読の有無<br>有       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                     | 国際共著<br>-        |

|   |                          |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名<br>Masaya Kobayashi  | 4. 巻<br>13 December 2021 |
| 2. 論文標題<br>Political Philosophies and Positive Political Psychology: Inter-Disciplinary Framework for the Common Good | 5. 発行年<br>2021年          |
| 3. 雑誌名<br>Frontiers in Psychology   | 6. 最初と最後の頁<br>-          |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.3389/fpsyg.2021.727818   | 査読の有無<br>有               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |

|   |                          |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名<br>Masaya Kobayashi  | 4. 巻<br>28 February 2022 |
| 2. 論文標題<br>Psychological Examination of Political Philosophies: Interrelationship Among Citizenship, Justice, and Well-Being in Japan | 5. 発行年<br>2022年          |
| 3. 雑誌名<br>Frontiers in Psychology   | 6. 最初と最後の頁<br>-          |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.3389/fpsyg.2021.790671   | 査読の有無<br>有               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>小林正弥                         | 4. 巻<br>第17巻第1号     |
| 2. 論文標題<br>幸福と公共性 コロナ後の社会を展望しつつ        | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>公共研究                         | 6. 最初と最後の頁<br>35-79 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>小林正弥                                       | 4. 巻<br>第17巻第1号       |
| 2. 論文標題<br>コミュニタリアニズム・社会システム論のシステム論的ポジティブ心理学としての再定式化 | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>公共研究                                       | 6. 最初と最後の頁<br>154-172 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                       | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)               | 国際共著<br>-             |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>石戸光                                 | 4. 巻<br>第17巻第1号         |
| 2. 論文標題<br>主観的な幸福度と客観指標としてのSDGsとの関連についての基礎的考察 | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>公共研究                                | 6. 最初と最後の頁<br>173 - 180 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)        | 国際共著<br>-               |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>李想・安倍能之   | 4. 巻<br>第17巻第1号         |
| 2. 論文標題<br>Urban nature exposure, physical activity, sleep quality and the search for meaning in life of university students in Japan | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>公共研究  | 6. 最初と最後の頁<br>265 - 290 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>-               |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>石戸光・田代佑紀・Sami Wong  | 4. 巻<br>第17巻第1号         |
| 2. 論文標題<br>COVID-19 and Societal Wellbeing: A Text Analysis and Issues on National Sovereignty in Focus | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>公共研究  | 6. 最初と最後の頁<br>244 - 264 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>該当する            |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Masaya Kobayashi   |
| 2. 発表標題<br>Examining the correlational and causal relation between psychological features and performance in a Japanese company |
| 3. 学会等名<br>International Positive Psychology Association 7th IPPA World Congress 2021 (国際学会)                                    |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Masaya Kobayashi  |
| 2. 発表標題<br>Four-Dimensional Psychological Theory and Public Philosophy: Factors Related to Business Performance and Positive Social Sciences |
| 3. 学会等名<br>International Positive Psychology Association 7th IPPA World Congress 2021 (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2021年  |

〔図書〕 計5件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Oades, Lindsay Masaya Kobayashi Afsana Begum and Others                             | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>千葉大学公共研究センター  | 5. 総ページ数<br>50  |
| 3. 書名<br>COVID-19 and Issues on Global Social Justice コロナ禍とグローバルな社会的正義（千葉大学公共研究センターワーキングペーパー） |                 |

|                                   |                 |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>小林正弥                    | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>講談社                     | 5. 総ページ数<br>304 |
| 3. 書名<br>ポジティブ心理学 科学的メンタル・ウェルネス入門 |                 |



|                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>石戸光・鈴木絢女 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店     | 5. 総ページ数<br>292 |
| 3. 書名<br>多元化する地域統合 |                 |

|                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>水島治郎・米村千代・小林正弥 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>明石書店           | 5. 総ページ数<br>312 |
| 3. 書名<br>公正社会のビジョン       |                 |

|                       |                 |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>酒井 啓子編：石戸光  | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店        | 5. 総ページ数<br>218 |
| 3. 書名<br>グローバル関係学とは何か |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                     | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                  | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 石戸 光<br><br>(Hikari Ishido)<br><br>(40400808) | 千葉大学・大学院社会科学研究院・教授<br><br><br>(12501)  |    |
| 研究分担者 | 李 想 (李想)<br><br>(Li Xiang)<br><br>(20722143)  | 千葉大学・大学院社会科学研究院・准教授<br><br><br>(12501) |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|                   | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                           | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)               | 備考 |
|-------------------|---|-------------------------------------|----|
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 木下 征彦<br><br>(Kinoshita Yukihiro)<br><br>(10440025) | 日本大学・商学部・准教授<br><br><br><br>(32665) |    |

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

|                              |                    |
|------------------------------|--------------------|
| 国際研究集会<br>ポジティブ政治心理学セミナー（3回） | 開催年<br>2022年～2023年 |
|------------------------------|--------------------|

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |  |  |  |
|---------|---------|--|--|--|
| オーストラリア | メルボルン大学 |  |  |  |
| 米国      | マイアミ大学  |  |  |  |